

【優秀賞】

白波のむこうの故郷

釧路市立景雲中学校

2年 伊藤 悠緋

「元気なうちに父さんのお墓参りに行きたいんだけどね。」「私の願いは島の土を踏みたいそれだけよ。」と僕の曾祖母は言っていました。

僕の曾祖母は、歯舞群島の志発島という島で幸せに暮らしていたそうです。お祭りになると島全体で楽しみ、ごちそうを食べてとても幸せだったと曾祖母は楽しそうに僕に話してくれました。しかし曾祖母が10才の頃、ロシアが「日ソ中立条約」を無視し、日本に宣戦布告し、千島列島への攻撃、そして北方領土を占領したのです。そして曾祖母達は、貨物船に乗り根室に引き揚げて来たそうです。貨物船に乗るまでは、ロシア兵に見つからないよう荷物を背負い、幼い妹の手を握り必死に貨物船への道を歩いたそうです。落ちついたらまた島に帰れると信じて根室に向かったと曾祖母は言っていました。

それから七十七年の年月が経ってしまいました。一緒に引き揚げた人達が、島の土を踏めないまま、一人、また一人と亡くなっています。故郷に帰れず亡くなっていった人達がとてもかわいそうだと僕は思います。

今年で北方領土が占領されてから七十七年が経ちました。七十七年経った今でも、島へ帰りたと思う気持ちは変わらないでしょう。また、残念な事に亡くなってしまった方達も故郷への思いは消える事はないと思います。

今、僕達にできる事は、北方領土の事、暮らしていた人達の事を知る事から初めなければならないと思いました。そのために僕は、こうして作文を書き、北方領土のイベントなど時間のゆるす限り参加し勉強していこうと思います。つい最近では北方領土を知る集いに参加し、「エトピリカ～思いを紡ぐ鳥～」を鑑賞し、元島民の方のお話も聞きました。そして、それに参加し、ロシアが奪ったのは北方領土だけではなく島の文化、島の町並み、島民達の故郷です。曾祖母以外からのお話を聞いたのは初めてだったのもあり、胸がしめつけられるような感覚になりました。なんとか早期解決をし、元島民の方達に故郷の土を踏ませてあげなくてはという思いが強くなりました。

今までは、北方領土島民一世から三世までの方達が、主に返還運動をされて下さっていますが、これからは四世の僕達も島の事をもっと知り、声をあげて一人でも多くの元島民の方達に島へ自由に帰られるように声を上げていきたいと思います。また、北方領土周辺に住み、漁業を営んでいる方達も大変苦勞していると聞きます。僕達の食卓にあがる鮭、さんま、昆布それらを採るための漁業協力費をロシアに支払っていると知り北方領土を奪い、漁場までも奪っていると知り、とても驚きました。そして、ウクライナ情勢の影響で安心して漁もできない状態だという事も知りました。北方領土の問題は、領土を奪われてしまってから元島民の思い、漁業に携わる人達などのたくさんの問題が山積みです。今、ウクライナ情勢で、様々な問題が一気に迫ってきた今だからこそ、あきらめずに声をあげていきたいと思います。